[改訂版] コミュニケーション：理解

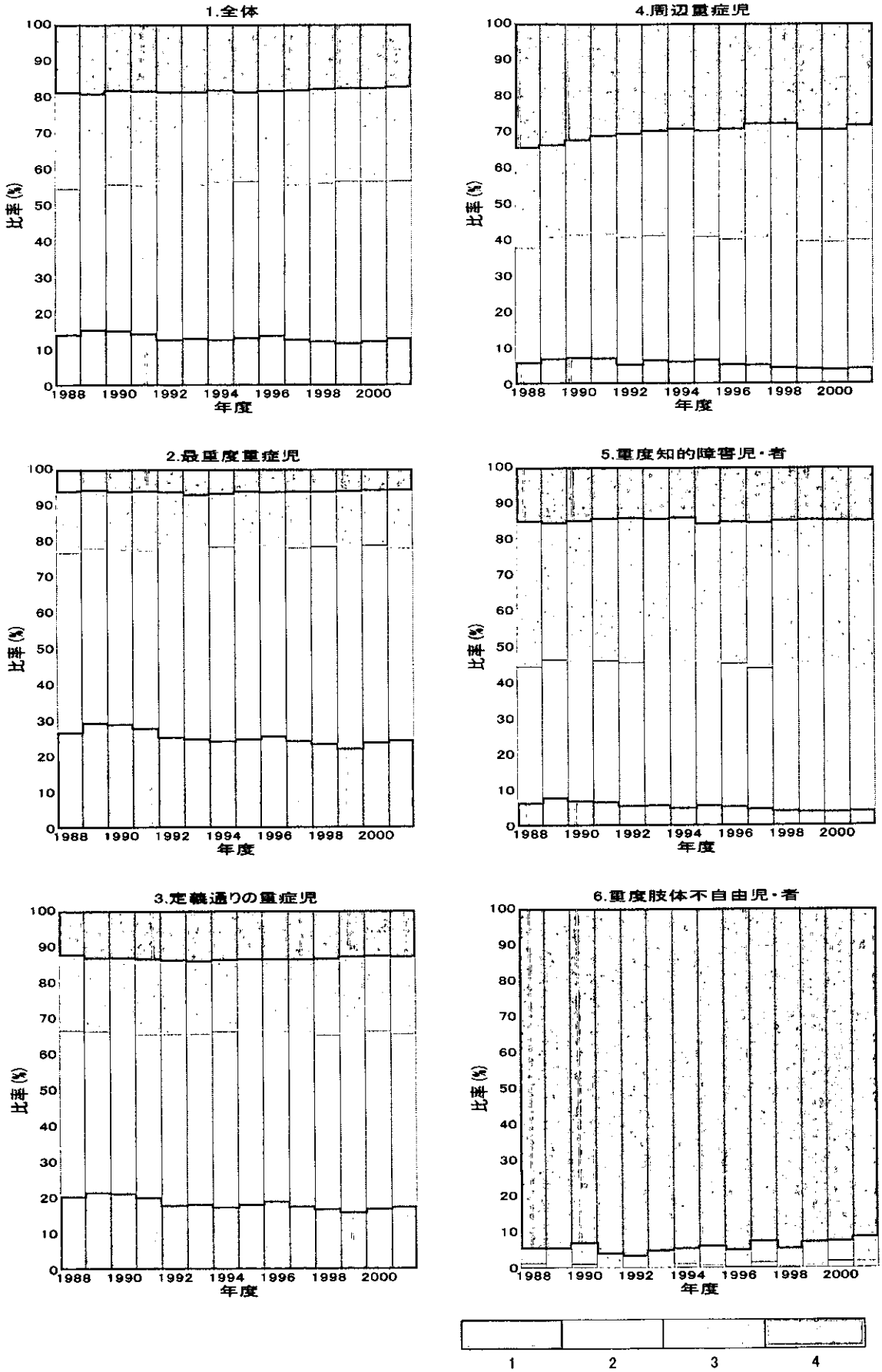

図7-2(B)

[旧版] コミュニケーション：表現

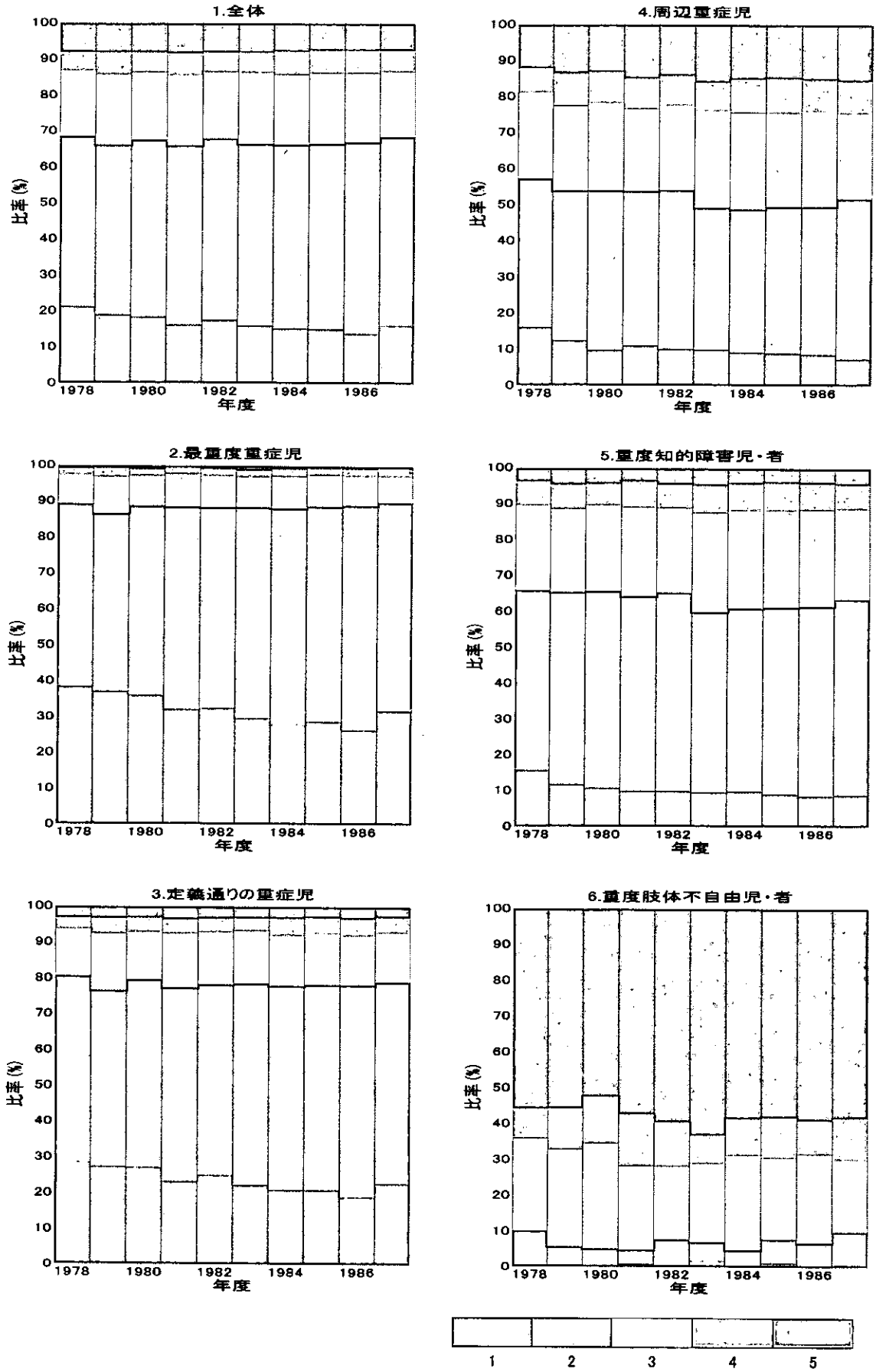

図7-3(A)

[改訂版] コミュニケーション：表現

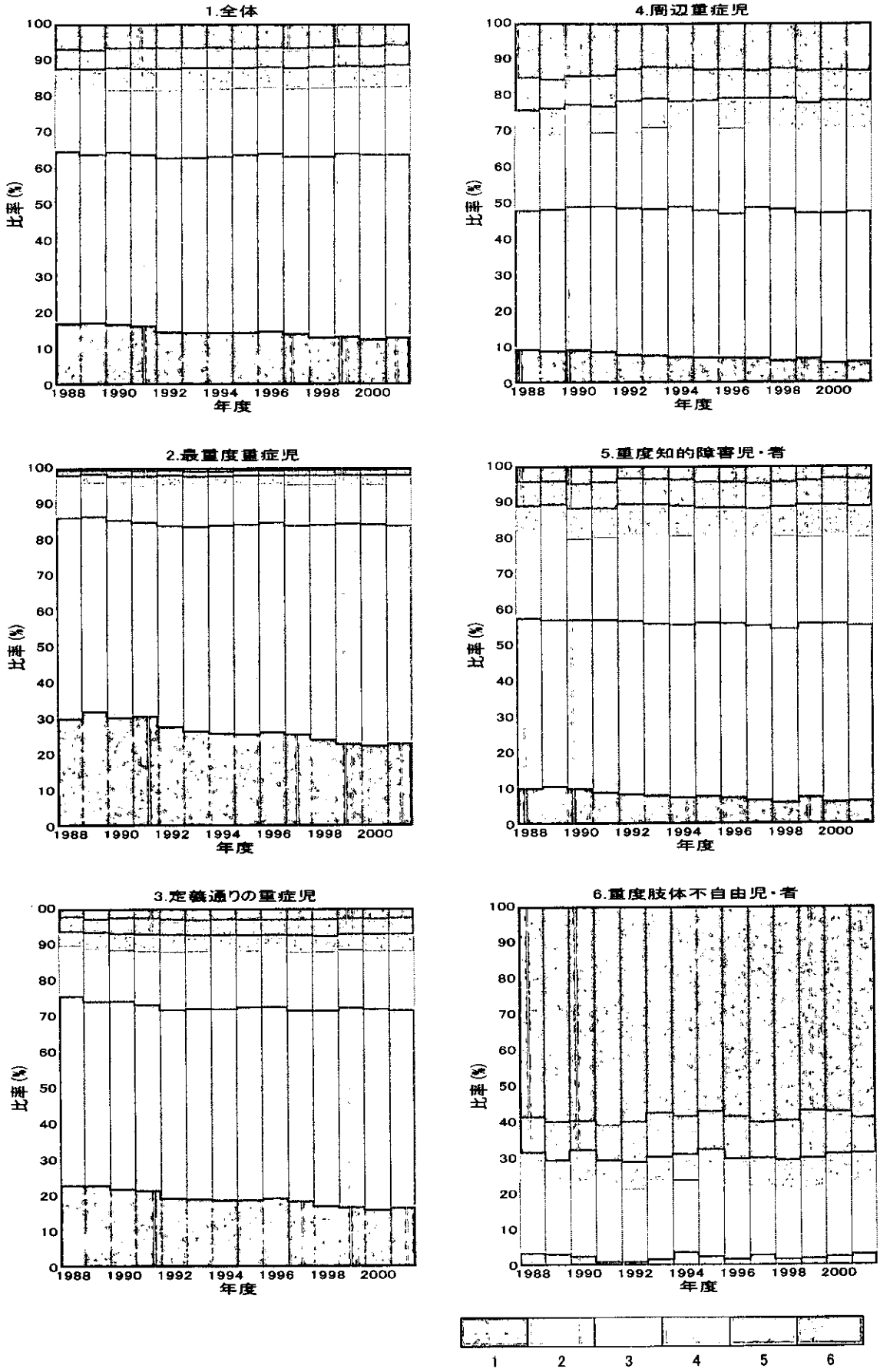

図7-3(B)

8．問題行動

，問題行動のチェック内容が旧版と改訂版では全く異なっているので，旧版についてはその結果を図 8-1 で示すに止め，改訂版についてのみ以下に述べる。改訂版での問題行動は異常習慣と対人関連行動とに分けて調査した。さらに，異常習慣については<指しゃぶり，髪抜き，耳いじりなど>，<オナニー>，<自傷>，<首振り，頭叩きなどの常同行動など>，<便こね><異食><その他>のそれぞれにつき，「日常的にある」，「時々ある」，「なし」，に分けて，調査を行った。「対人関連行動」については，<攻撃的，反抗的態度>，<排他，拒絶的行動>，<奇声，叫声><ひどいいたずら><衝動的・発作的行動><他害><その他>に分け，同じく，「日常的にある」，「時々ある」，「なし」，に分けて調査を行った。

■旧版■

1. ない
2. 時々ある
   a) 困らない　b) 少し困る　c) 非常に困る
3. いつもある
   a) 困らない　b) 少し困る　c) 非常に困る

< 図 8-1 >

8.1. 異常習慣
（<指しゃぶり等>，<オナニー>，<自傷>，<首振り等>）

■改定版■　<指しゃぶり，髪抜き，耳いじりなど>

1. 日常的にある
2. 時々ある
3. なし

<オナニー>，<自傷>，<首振り，頭叩きなどの常同行動>
も同様の設問

異常習慣のうち<指しゃぶり等>，<オナニー>，<自傷>，<首振り等>の４項目それぞれのデータ（1.～3.）のなかで最小値を選択し，これを４項目の代表値とした。その結果，全体では，５０％余りが，「なし」で占められた。残りのうち，それぞれ２分の１ずつが，「日常的にある」と「時々ある」で占められていた。ただし，年次推移では，「日常的にある」が，若干減少傾向を示していた。そして，障害程度別でみると，最重度重症児と定義通りの重症児では，「なし」の比率がさらに高まり，前者で約７０％，後者で約６０％となっていた。残りのそれぞれ２分の１程度ずつが，「日常的にある」と「時々あ

る」を占めていた。それがさらに，重度知的障害児・者になると，約８５％が，「なし」で占められ，「日常的にある」は，１～２％程度にとどまっていた。一方，周辺重症児と重度肢体不自由児・者では，前者がほぼ全体と同様であるのに対し，後者は，「なし」が３５％程度に減少し，「日常的にある」が，３５％程度に増え，「時々ある」も同じく３５％程度を占めていた。それぞれでの異常習癖での内容と年度推移等については，より詳細な分析が期待される。

＜ 図 8-2 ＞

8.2. 異常習慣（便こね）

■改定版■　＜便こね＞

1. 日常的にある
2. 時々ある
3. なし

＜便こね＞については，全体で９０％以上が「なし」で占められ，「時々ある」が７～８％，「日常的にある」は１％以下であった。障害程度別でみると，重度知的障害児・者と，周辺重症児において，「時々みられる」が，１０～１５％程度を占めていた。それに対し，最重度重症児，定義通りの重症児については，「時々ある」が，２～５％程度を占めるにとどまる。さらに，重度肢体不自由児・者では，「なし」が，ほぼ１００％近い率を占めていた。

＜ 図 8-3 ＞

8.3. 異常習慣（異食）

■改定版■　＜異食＞

1. 日常的にある
2. 時々ある
3. なし

＜異食＞については，全体で９０数％が「なし」で占められ，「時々ある」が，７～８％，そして「日常的にある」が２％程度であった。障害程度別でみると，重度知的障害児・者で「あり」の比率が最も高く，「時々ある」が，１５％前後を，そして「日常的にある」が５％前後を占めていた。しかし，その「日常的にある」と「時々ある」のいずれも年度推移をみると，わずかずつではあるが，減少傾向を示していた。周辺重症児は，全体と重度知的障害児・者

の中間を占める率を示しており，ついで，定義通りの重症児，最重度重症児の順に「あり」の率が減少し，重度肢体不自由児・者では，「なし」がほぼ１００％を占めた。

＜ 図 8-4 ＞

8.4. 異常習慣（その他）

■改定版■　＜その他＞

1. 日常的にある
2. 時々ある
3. なし

＜その他＞の異常習慣を示すものは，全体では，９０％近くが「なし」で，「日常的にある」が８％程度，「時々ある」が２～３％程度を占めていた。障害程度別でみると，重度知的障害児・者で，「あり」の率が最も高く，「日常的にある」が，１２～５％を占め，「時々ある」も５～７％程度を占めていた。ついで，周辺重症児，定義通りの重症児そして，最重度重症児の順に，「あり」の率が減少している。さらに重度肢体不自由児・者では，９７～８％が，「なし」で占められ，残りは「時々ある」と，「日常的にある」が，それぞれ１～２％を占めるにとどまっていた。

＜ 図 8-5 ＞

8.5. 対人関連行動
（＜攻撃的・反抗的態度＞，＜排他・拒絶的傾向＞，＜ひどいいたずら＞）

■改定版■　＜攻撃的・反抗的態度＞

1. 日常的にある
2. 時々ある
3. なし

＜排他・拒絶的傾向＞，＜ひどいいたずら＞も同様の設問

問題行動・対人関連行動のうち，＜攻撃的・反抗的態度＞，＜排他・拒否的行動＞，＜ひどいいたずら＞のうち，最小値選択による分析の結果は，以下の通りであった。全体では６０％余りが「なし」で占められ，「時々ある」が２５％を占め，「日常的にある」が５％前後であった。ここでも，障害程度別にみると，重度知的障害児・者で「あり」が最も高く，「時々ある」が，５０～６０％を占め，「日常的にある」は１０％前後であった。なお，年度推移をみ

ると，「時々ある」が漸増傾向を示すのに対し，「日常的にある」と「なし」は，いずれも減少傾向を示していた。周辺重症児ついで，定義通りの重症児そして最重度重症児の順に，「あり」の比率が減少し，「なし」の比率が高まる傾向を示した。ところが，重度肢体不自由児・者では，前述の「異常習慣」と違い，「なし」が，７０％程度にとどまり，「時々ある」が，年度により，若干の変動はあるが，２５～３０％程度を占めていた。「日常的にある」も数％を示していた。

＜ 図 8-6 ＞

8.6. 対人関連行動
（＜奇声・叫声＞，＜衝動的・発作的行動＞）

■改定版■　＜奇声・叫声＞

1. 日常的にある
2. 時々ある
3. なし

＜衝動的・発作的行動＞も同様の設問

全体では，６０％前後が「なし」で占められ，「時々ある」が３０％前後，そして「日常的にある」は１０％足らずであった。年度推移をみると，「日常的にある」が，わずかながら，減少傾向を示していた。障害程度別にみると，重度知的障害・者で，「なし」が最も少なく，４０％程度にとどまり，「時々ある」が，４５ないし５０％を占め，「日常的にある」も，１２～１６％程度と高い率を示していた。周辺重症児についで，定義通りの重症児そして最重度重症児の順に，「なし」の比率が高くなり，重度肢体不自由児・者で，その率は８５％前後になっていた。

＜ 図 8-7 ＞

8.7. 対人関連行動（他害）

■改定版■　＜他害＞

1. 日常的にある
2. 時々ある
3. なし

全体では，８０数％が，「なし」で占められ，「時々ある」が，１５％程度，そして残り数％が，「日常的にある」となっていた。ここでも，障害程度別に

みると，重度知的障害・者で，「なし」の比率が７０％前後を，「時々ある」が２５％～３０％，「日常的にある」が５％前後を占めていた。周辺重症児，ついで定義通りの重症児の順に，「あり」の率が減少し，最重度重症児では，さらに，その率が減少し，５％程度になっていた。ところが，重度肢体不自由児・者では，定義通りの重症児と最重度重症児の中間に位置する数値を示していた。

＜ 図 8-8 ＞

8.8. 対人関連行動（その他）

■改定版■　＜その他＞

1. 日常的にある
2. 時々ある
3. なし

対人関連行動のうち，自由記入による＜その他＞が，「あり」としたものは，全体で，５％前後にとどまった。障害程度別でみると，重度知的障害児・者，そして周辺重症児で，その率が少し高く，７～８％程度から１１～１２％程度を占めていた。しかし年度推移をみると，減少傾向が伺われた。重度肢体不自由児・者，ついで定義通りの重症児そして最重度重症児の順に，「あり」の比率は低下していた。

＜ 図 8-9 ＞

[旧版] 問題行動

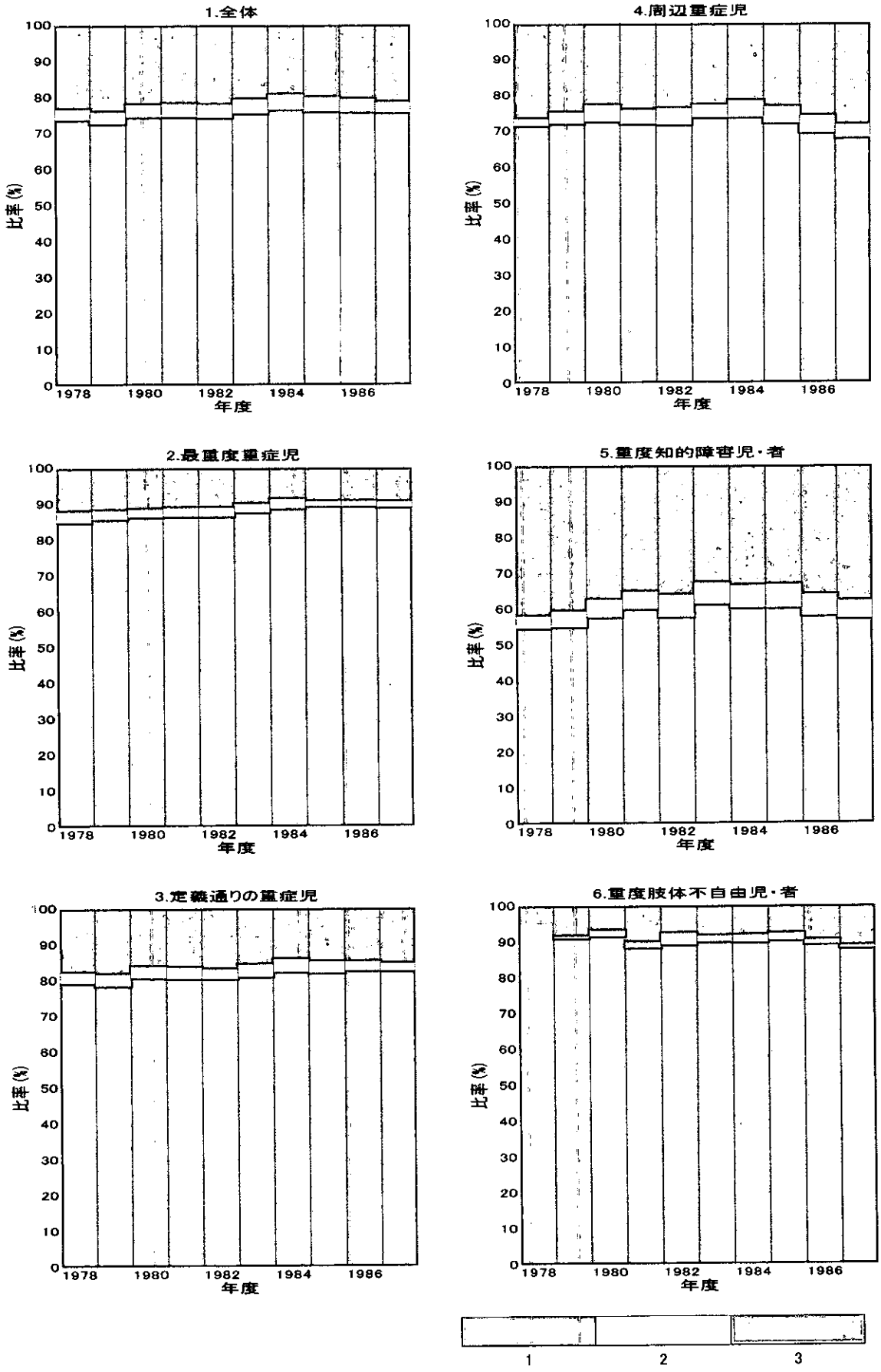
1.全体
2.最重度重症児
3.定義通りの重症児
4.周辺重症児
5.重度知的障害児・者
6.重度肢体不自由児・者
比率(%)
年度
1978
1980
1982
1984
1986
1
2
3

図8-1

[改訂版] 問題・異常習慣：指しゃぶり等,オナニー,自傷,首振り等(最小値選択)

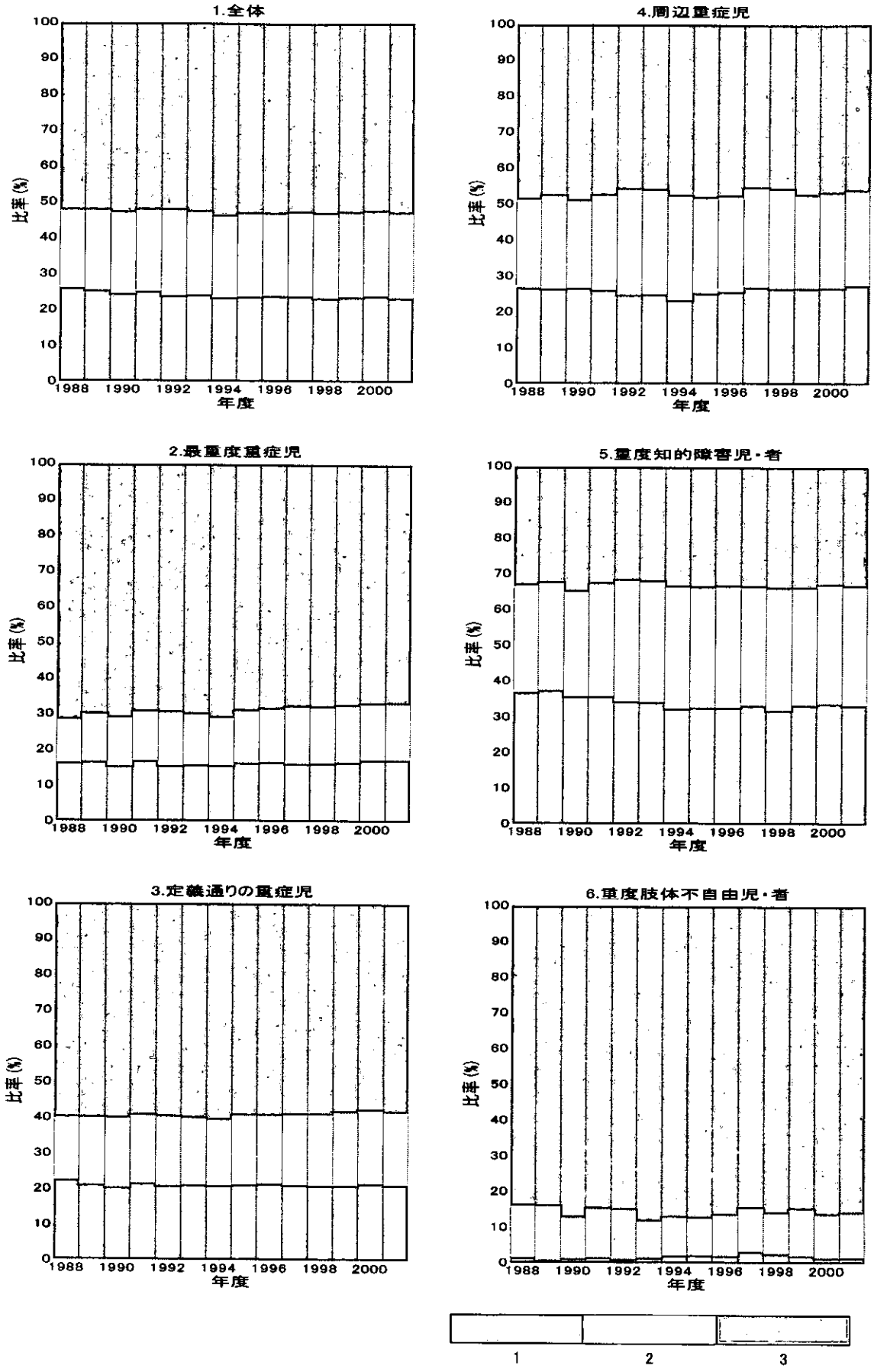

図8-2

[改訂版] 問題行動・異常習慣：便こね

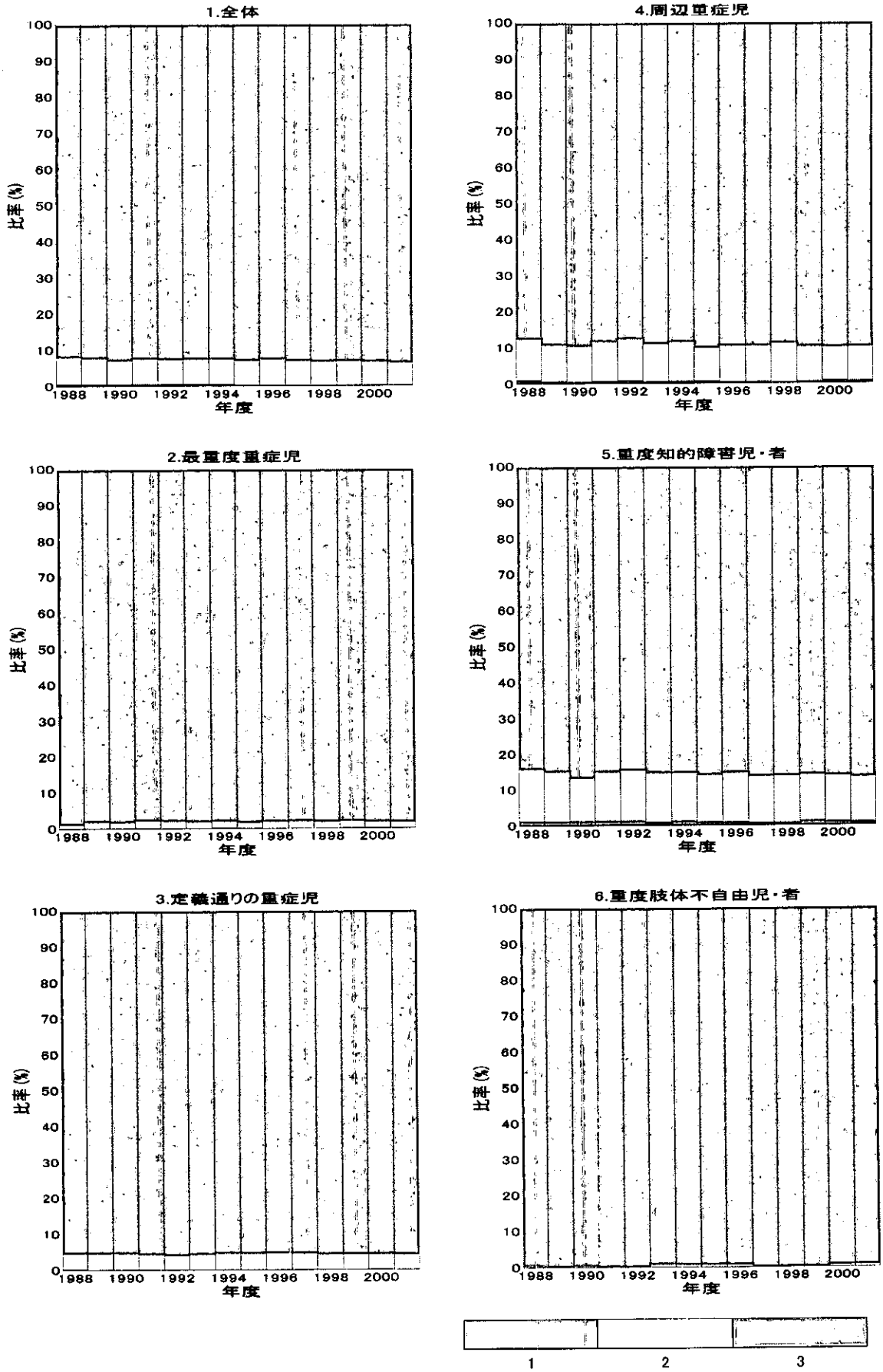

図8-3

[改訂版] 問題行動・異常習慣:異食

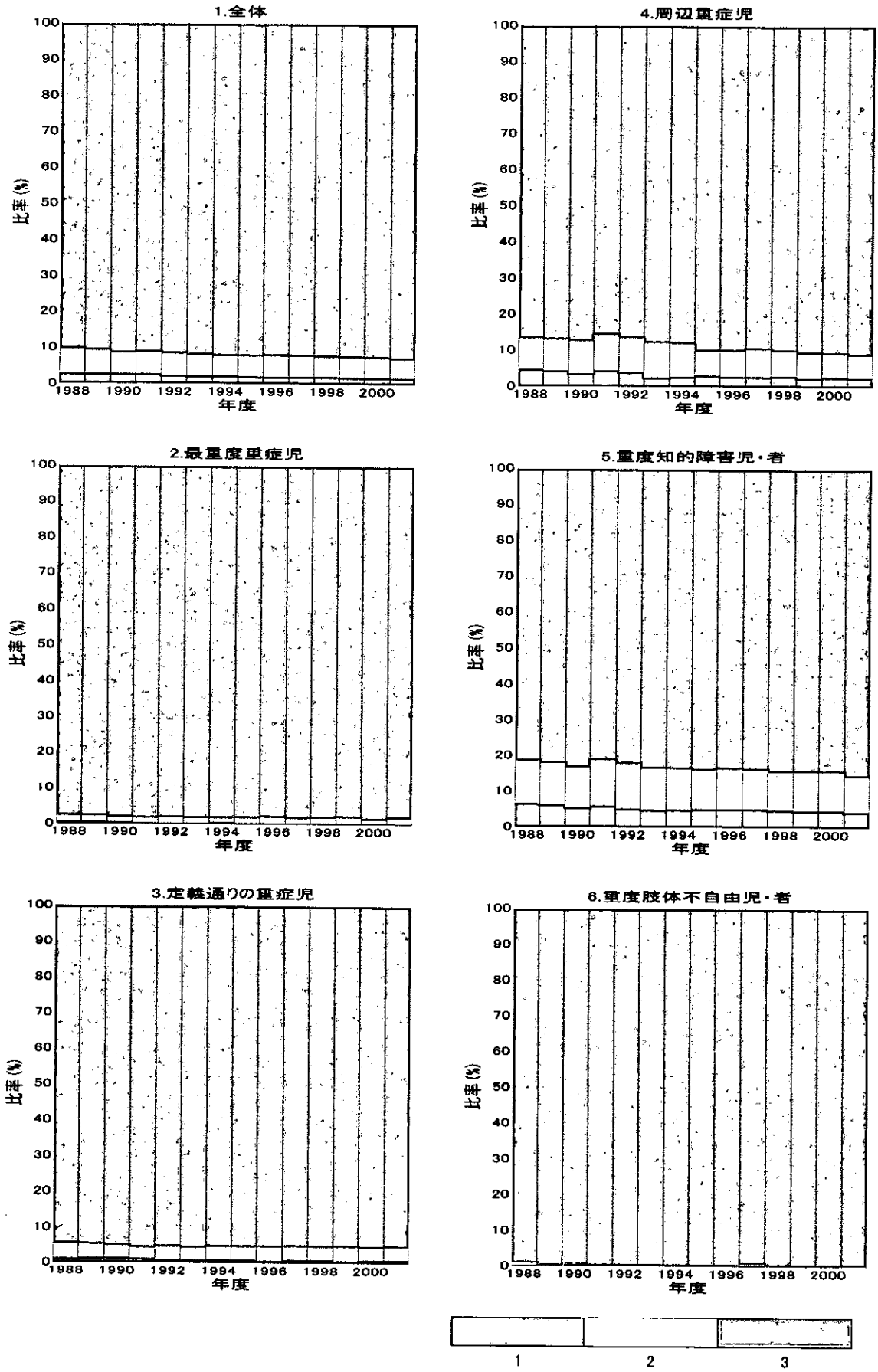

図8-4

[改訂版] 問題行動・異常習慣：その他

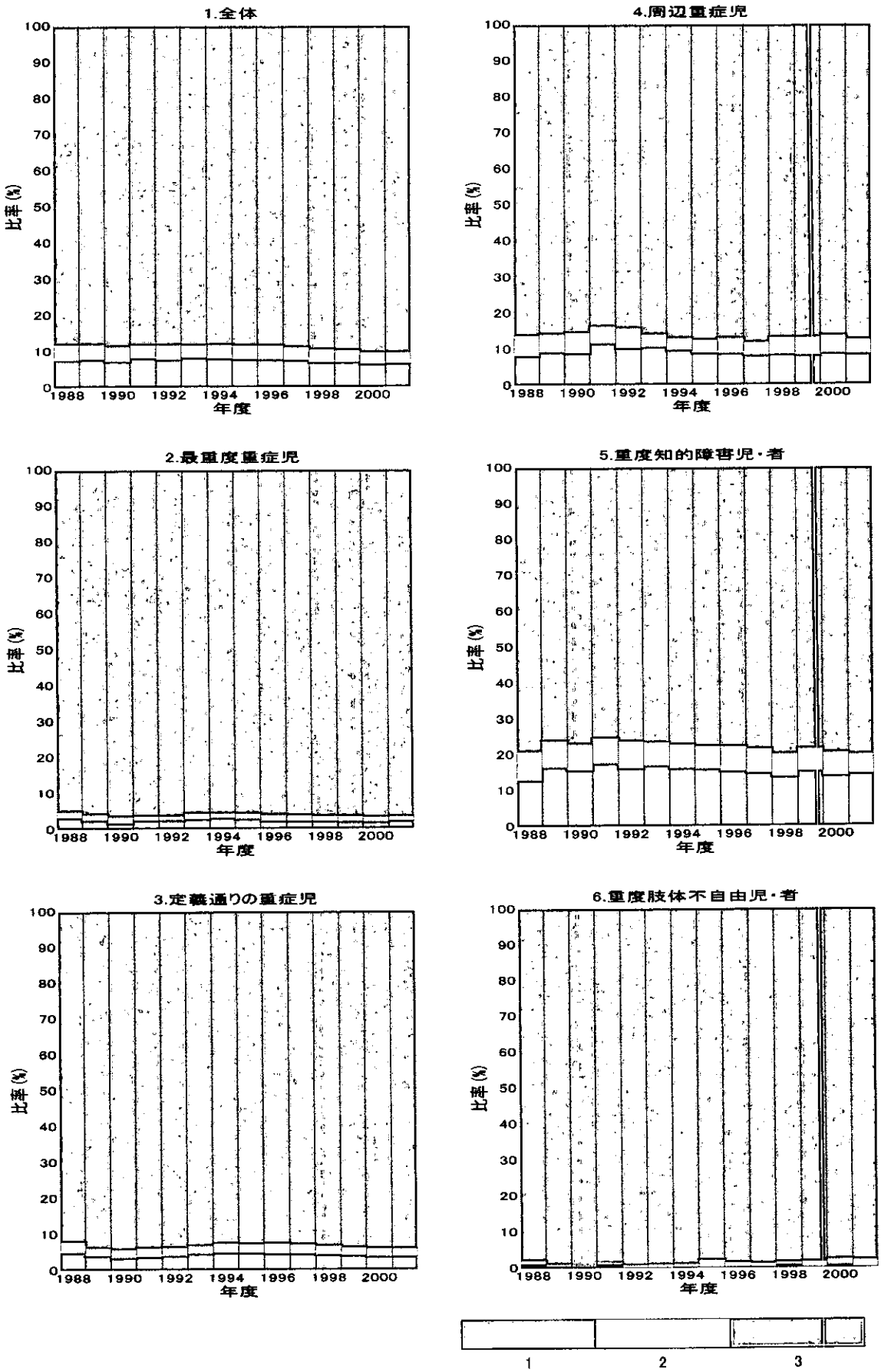

図8-5

[改訂版] 問題・対人行動：攻撃的態度、排他的傾向、いたずら(最小値選択)

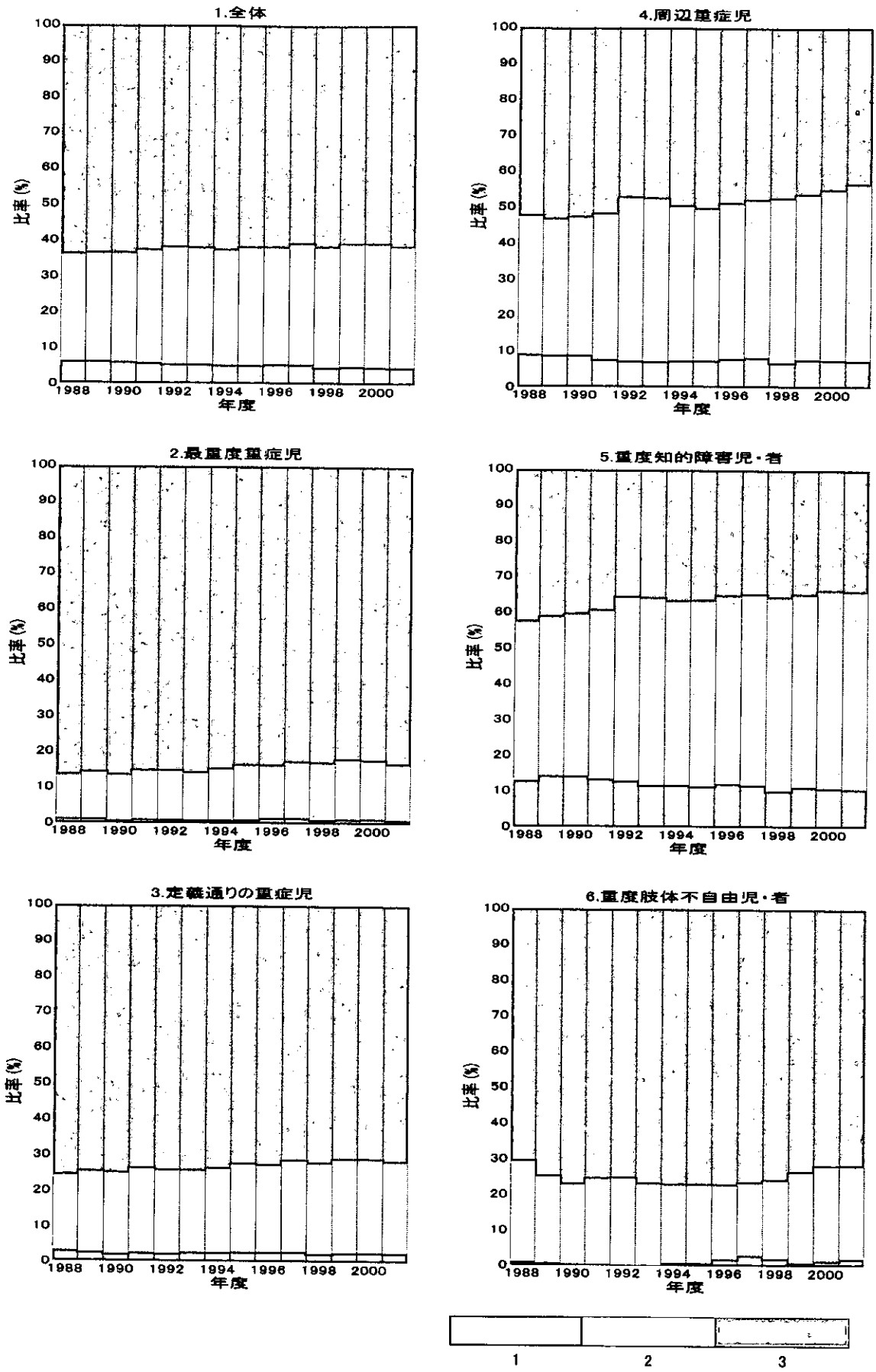

図8-6

[改訂版] 問題・対人行動：奇声・叫声、衝動的・発作的行動(最小値選択)

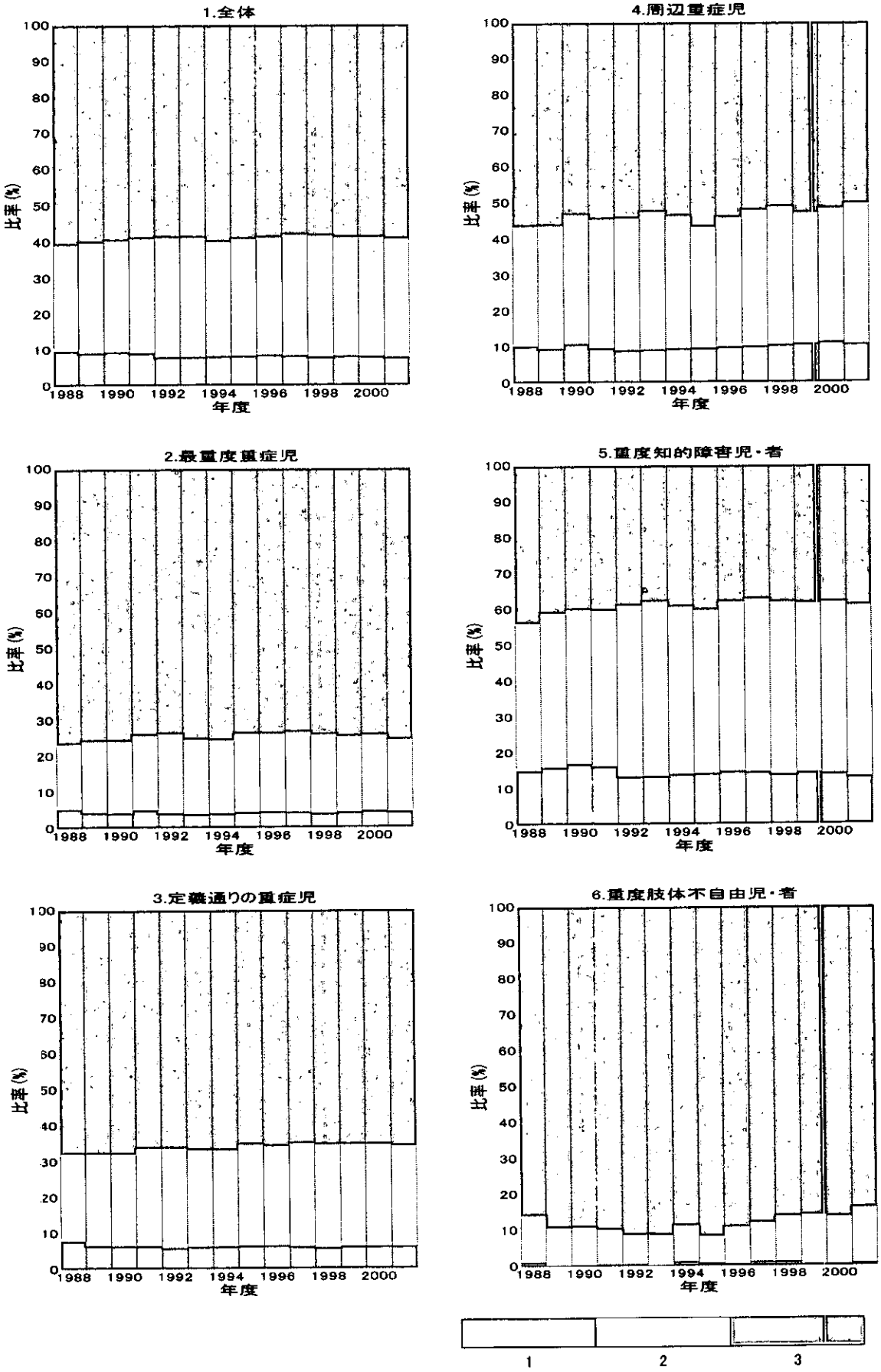

図8-7

[改訂版] 問題行動・対人関連行動：他害

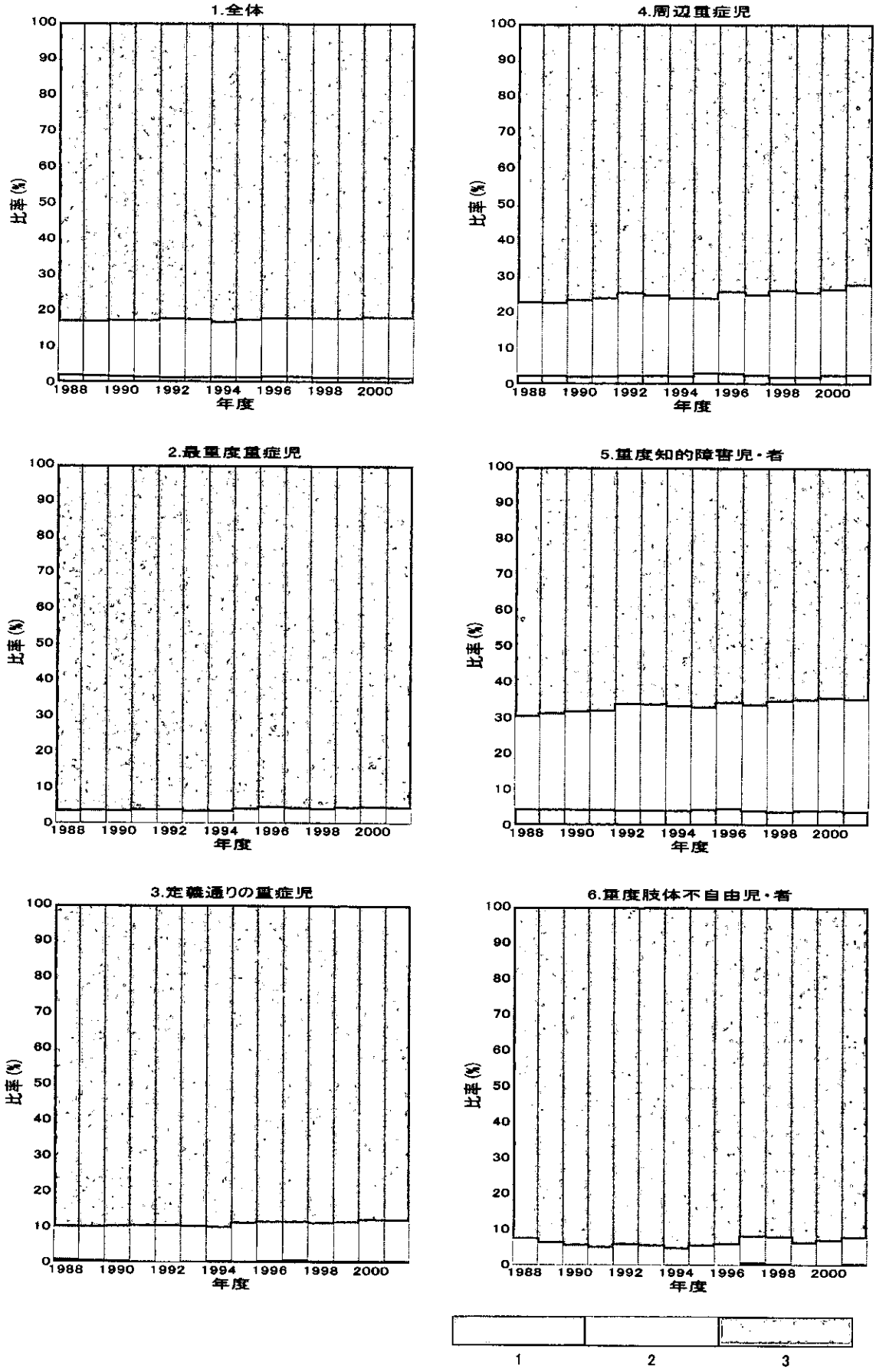

図8-8

[改訂版] 問題行動・対人関連行動：その他

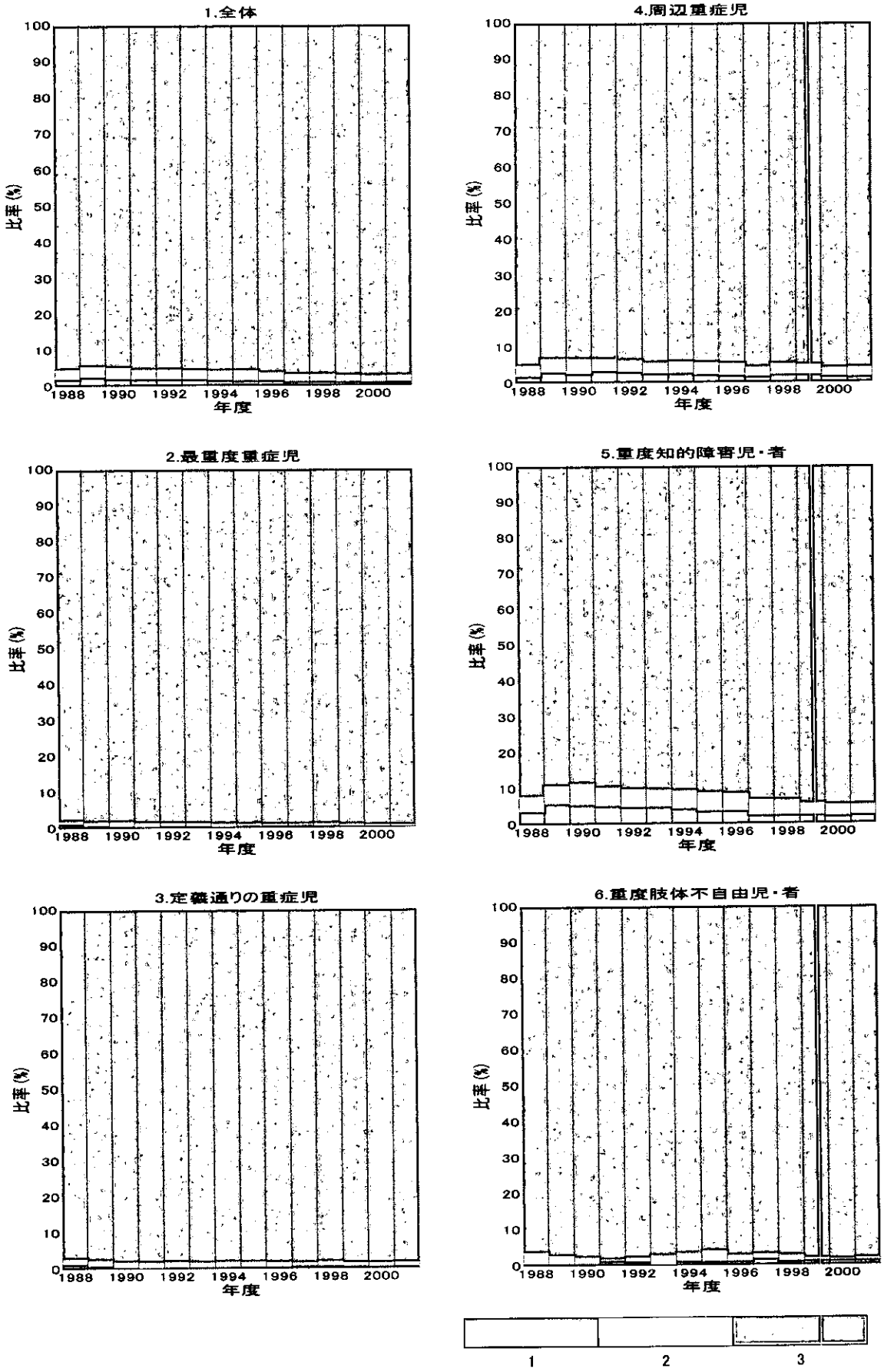

図8-9

9．痙攣・てんかん性発作

■旧版■　痙攣

1. 現在まで一度もみられない
2. 過去にみられたが，ここ１年間は発作はみられない
3. ここ１年間発作はみられるが回数は少ない（10 回以下）
4. ここ１年間発作は 10 回以上あるが，
   ここ２カ月間は発作がみられない
5. ここ２カ月間発作はあるが回数は少ない（10 回以下）
6. ここ２カ月間発作がかなり多い

■改訂版■　てんかん性発作

1. この２カ月間かなりあった
2. この１年間で 10 回以上あった
3. この１年間で 10 回未満あった
4. 過去にあったが，この１年間はない
5. 現在までに一度もない

■改訂版■　抗痙れん剤服用の有無

1. 有
2. 無

本項目に関しては，旧版の調査に対し，改訂版の調査の内容設定に若干の変更が行われた。すなわち，設問数が６から５に，また設問内容の順序が変更されたが，対応する設問を改訂版に準じて読みかえた。

旧版の調査では何らかの問題があった 1.～3. のうち，1. は最重度重症児が 14%，定義通りの重症児は約 11%であり，4. と 5. は前者が約 54%，後者が約 60%であった。これに対して，改訂版の調査では，1.～2. の頻度は最重度重症児，定義通りの重症児とも若干の増加傾向を認めた。なお，何れの調査でも，重度知的障害児・者ならびに重度肢体不自由児・者においては，1.～2. の割合は低いが，重度知的障害児・者の方が重度肢体不自由児・者よりも高い傾向を認めた。また，全体でみると，4.～5. は旧版の調査に比べて改訂版の調査で減少している傾向を認めた

＜ 図 9-1，9-2，9-3 ＞

[旧版] けいれん

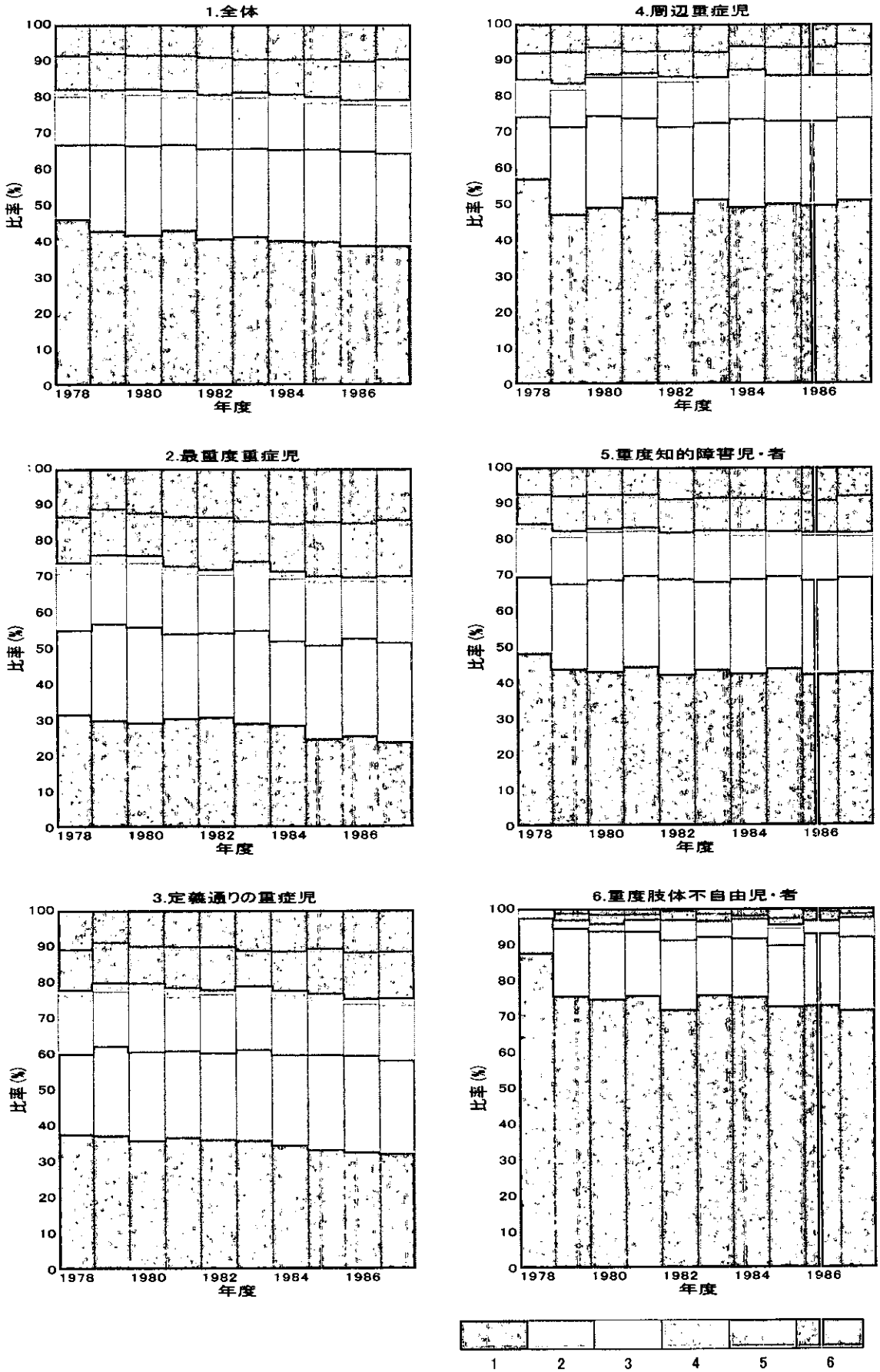
1.全体
2.最重度重症児
3.定義通りの重症児
4.周辺重症児
5.重度知的障害児・者
6.重度肢体不自由児・者
比率(%)
年度
1978
1980
1982
1984
1986
1
2
3
4
5
6

図9-1

[改訂版] てんかん性発作

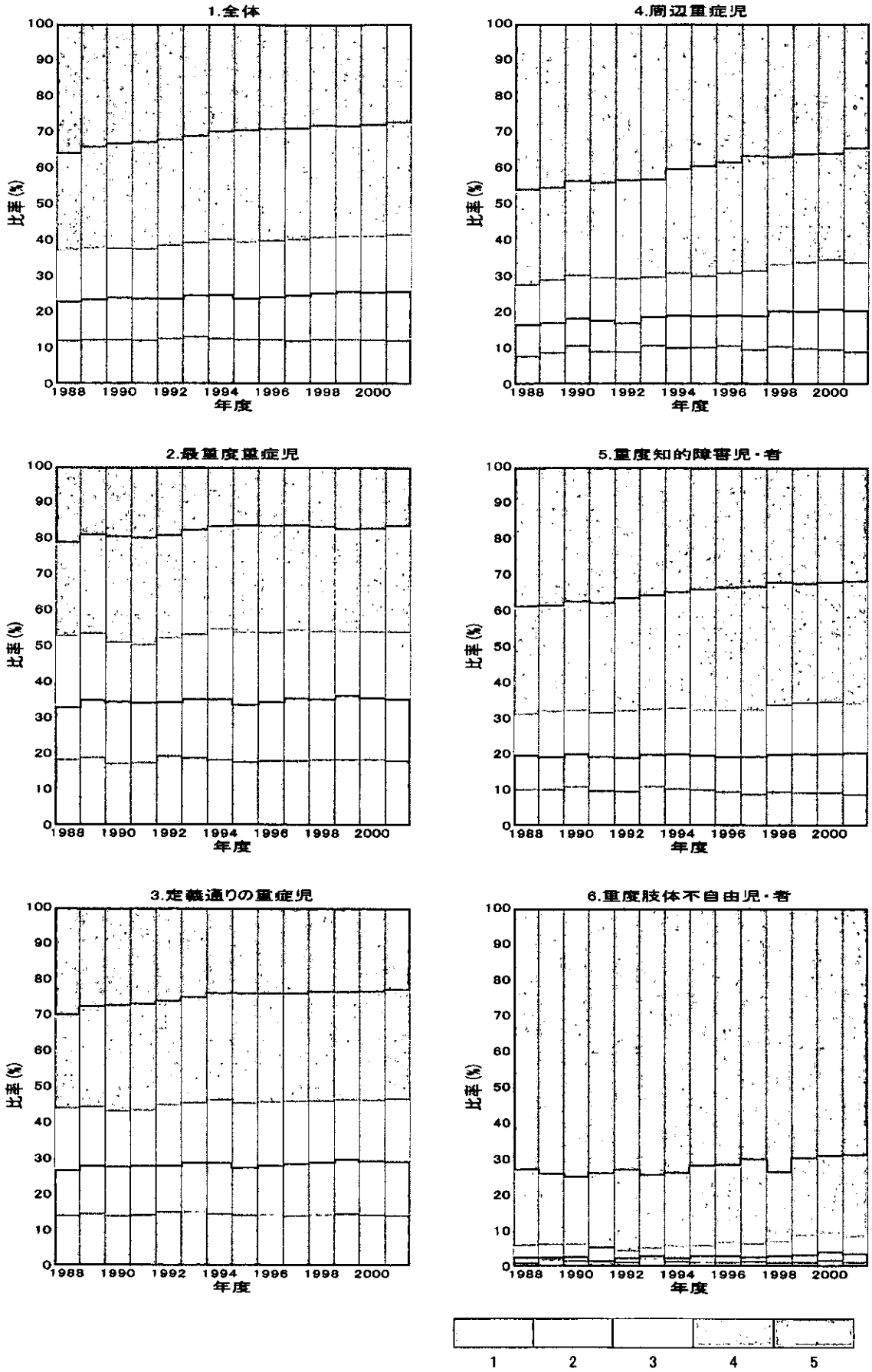

図9-2